



健康最前線

今月のテーマ
熱性けいれん

発行：土川内科小児科
二本松市榎木250の3
電話：0243-22-6688
発行責任者：土川研也

高い熱を出したときにけいれんを起こし意識を失う熱性けいれんについては、比較的良く知られていると思いますが、はじめてひきつけを経験したおかあさんはびっくりしてあわててしまう事と思います。熱性けいれんの頻度はそれほど多いものではありませんが、突然出会っても冷静に対処できるようにするためには、熱性けいれんについてあらかじめ良く知っておくことが大切です。

■けいれんひきつけとは

一時的に呼吸が止まり、白目をむいて体をこわばらせ、意識を失う状態です。原因としては熱性けいれん（一番多い）のほかに、てんかん、髄膜炎・脳炎、頭部外傷、水や電解質の不均衡、代謝異常などがあげられます。

■熱性けいれんの本態や発症機序

てんかんの関連については解明されていませんが、脳の発達が未熟なため、熱が出たなどのちょっとしたことが脳細胞を刺激してけいれんを起こすものと考えられています。生後6カ月から5歳までにみられ、頻度は5歳以下の小児人口の7～8%。39度前後の発熱で、中枢神経系の感染によらないものをいいます。主な特徴は、

- ①通常急激な熱上昇に伴う、②けいれんは10分以内、③発熱後1～2時間以上たつてからみられることはほとんどない、④ふつつ1回の体温上昇に1回だけなどです。再発率は30～50%で、約1/3は2回以上繰り返すと言われています。

単純型熱性けいれん

- ①てんかんの家族歴（－）
- ②脳障害の原因となりうる疾患の既往がない
- ③発病年齢：生後6ヶ月～満6歳未満
- ④発作の持続時間：最高20分以下
- ⑤けいれん：左右対称性、巣症状（－）
- ⑥発作後：持続性意識障害（－）、片麻痺（－）
- ⑦明らかな神経症状、知能・性格障害を有しない
- ⑧発作が短時間に頻発することはない

①あわてない まず大切なのは、あわてないことです。けいれんは通常、数分以内で止まり、命にかかわることや後遺症を残すことはまずありませんので、冷静に対処して下さい。

②何もしない 舌をかむことはまずありませんから、口の中に指や箸・タオルなどを入れたりしないで下さい。かえって危険です。また、大声で名前を呼んだり、体を揺すったりするのもよくありません。刺激を与えることでけいれんが遷延したり誘発される場合があります。吐くと誤嚥・嘔吐物を間違えて気道の方へ吸い込んでしまうこと（の危険がありますので、体を横になかせ、衣服をゆるめて、楽な姿勢にしてあげましょう。

③じつと見る あとで、けいれんの様子をきちんと説明できるように、よく観察して下さい。時計をみて何分続いているかを確認する事も大切です。主観的には非常に長く感じるものですが、冷静に時間を計ってみるとそれほど長くない事がわかります。観察のポイントとは、顔色・目の動き・手足のつっぱり方・左右差・ひきつけていた時間などです。

■**急いで病院へ行った方がよい場合**

①**けいれんが5分以内に収まらない時**

90%以上は5分以内におさまる、5分以内のけいれんであれば年に4～5回生じても脳障害の危険性は考慮しなくても良いと考えられています。20分以上持続するけいれんでは1回のけいれんでも後遺症の心配が出てきます。

②意識障害が持続する場合

けいれんがおさまるとちよっとトロンとして、疲れたように眠ってしまっていますが、意識障害が持続することはありません。けいれんの前または後に意識障害が認められる場合には、脳炎や急性脳症の可能性がります。

③けいれんが繰り返して起きる場合

1回のけいれん発作が5分以内の短いものでも、24時間以内に2～3回以上繰り返す場合には、その後何度も繰り返す複雑型熱性けいれんの可能性が否定できません。

④半身または体の一部のけいれんの場合

通常は両方の手足をピンと突っ張った後、両手両足をガクガクとふるわせ、つまり左右対称性の動きを示します。左右差があったり、体の一部だけにけいれんが起これるのは、熱性けいれん以外の原因で起こっている可能性を考えなければいけません。

⑤けいれんに先行する神経学的異常・脳性麻痺・精神遅滞・小頭症などや発達障害の見られる場合

■けいれんがおさまったあとにすること

①何度くらいの熱があったかを確認する事は、診断や今後のためにも大切なことです。必ず体温計を使って、きちんとはかって下さい。何度かわかりませんが、かなり熱かったです。や、途中までははかったんですが「では役に立ちません。発熱の有無程度は熱性けいれんの診断には不可欠で、熱性けいれんだったかどうかは、予防接種のスケジュールなど今後の対策にも大きな影響をもちます。

②ひきつけをおこしたら、その原因を明らかにする事が大切です。単純性の熱性けいれんの場合には、救急車を呼ぶ必要はありませんが、その日のうちに医療機関を受診しましょう。深夜でしたら、症状にもよりますが、おちついていてる場合は翌朝かまいます。

③症状がおちついてる場合は、熱さま

しの座薬などは使わないで医療機関を受診してください。熱さましを使ってもおきてしまった熱性けいれんの治療にはなりません。

■熱性けいれんの治療

単純性熱性けいれんの場合には、無治療で経過を見ますが、左記の危険因子を有するものでは、抗けいれん剤・ダイアップ座剤などの投与が推奨されています（1988年熱性痙攣懇話会）。なお、将来てんかんを発症する危険因子を多く有する場合に抗けいれん薬の持続投与・フェバルビルなどが行われる事がありますが、一定期間抗けいれん薬を持続投与して、熱性けいれんの再発を予防すれば、てんかんの発症を防げるか否かは現時点では未定であり、今後の検討を待たねばなりません。

■予防接種はどうしたらよいでしょう

初回発作が生後6ヶ月以降の単純性熱性けいれんの場合は、基本的には現行の予防接種はすべて行ってかまわないと考えられますが、複雑型の場合には、小児神経を専門とする小児科医と相談する必要があります。なお、初めての熱性けいれんの場合には、2～3ヶ月の観察期間においてから、それ以外でも発熱の原因となる疾患があったわけですから、1ヶ月前後は様子を見てから予防接種を受ける方が無難と考えますが、はっきりとした取り決めはありませんので、ケースバイケースで、対象となる予防接種の種類により急いで受けなければならぬ時とそうでない時とでは自ずと対応が変わってきますので、ご相談下さい。

危険因子

- a) けいれん発症前の明らかな神経学的異常や発達遅延
- b) けいれんの持続が15～20分以上
- c) 焦点けいれんまたは部分優位けいれん
- d) 両親・同胞にてんかんまたは無熱性けいれんあり
- e) 初発年齢が1歳未満または6歳以後
- f) けいれんを24時間以内に2～3回繰り返す
- g) けいれん直前・直後の体温が37.5度未満
- h) 単純型であっても年に4～5回以上繰り返す

※この情報紙のコピー及びバックナンバーをご希望の方は受付までどうぞ。